

[9]

氏名	末吉 佐久子 <small>すえよし さくこ</small>
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第72号
学位授与の日付	2021年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	桃山茶陶の美的特質をめぐる研究
論文審査委員	主査教授 二階堂 善弘 副査教授 篠原 啓方 副査助教 吉川 和希 専門審査委員 名誉教授 中谷 伸生

## 論文内容の要旨

末吉佐久子氏の提出した博士論文『桃山茶陶の美的特質をめぐる研究』は、「桃山茶陶」という茶陶群を一つのカテゴリーとして捉え、その美的特質を問うものである。その視点は、伝世作品の造形におかれているが、それに止まらず、それらが本来あるべき茶室という空間からも、その美的特質を総合的に検討している。そして、これまで議論されてこなかった桃山茶陶研究の前提となる「桃山茶陶」という美術用語の成立過程、そしてその意義を考察し、さらに日本陶磁史研究における美的対象としての位置を提示したものである。

本論文の構成は、次のようになっている。

序論

第1章 日本陶磁史研究における美的対象としての「桃山茶陶」の位置

第2章 「桃山茶陶」という美術用語の成立過程とその意義

第3章 桃山茶陶の美的特質の諸相

第4章 桃山茶陶の美一言説からの考察

第5章 桃山茶陶の美的特質の背景にあるもの

第6章 海を越える侘数寄の美意識

第7章 茶室空間と桃山茶陶の美的特質

結論

図版

第1章では、日本陶磁史研究における桃山茶陶の美的対象としての位置を考察した。先

行研究では、日本陶磁史、茶道史、美術史の視点から、そして近年では、近代という視点から美術・工藝・茶道具論、そして文化財制度、政治動向などというフィルターを通しての位置が議論されている。本章では、新たな視点として日本陶磁史研究における美的対象としての桃山茶陶の位置を考察した。大きく枠づけをするならば、安土桃山時代を中心に生産され、あるいは採り上げられた「侘数寄の茶の湯の美意識が反映された茶陶群」である。具体的には、志野、織部、瀬戸、備前、伊賀、信楽、唐津、萩、そして樂を中心として構成される。器肌の焦げや破れなどにみられる「不完全性」、器形の歪みのような「非対称性」、土の素材感があるがまま活かしたような「無作為性」、茶室の土壁にとけ込むかのような「非存在性（同化的要素）」、そして抽象的文様などにみられる「自然の抽象的再現性」を持つものである。次に、桃山茶陶に焦点をあてつつ日本陶磁研究がどのようになされてきたのか、国内だけでなく国外からの視点を含めて検討した。

第2章では、これまで議論されてこなかった「桃山茶陶」という美術用語の初出を特定し、その成立過程、そしてその意義を見出した。「桃山茶陶」という美術用語の初出は昭和初期で、歴史は浅い。この美術用語が使われ始め、使用され続けている理由は、「侘数寄の茶の湯の美意識」が反映している茶陶群における造形の創造性と美的特性にあるといえよう。その求心力の核は、志野、織部、瀬戸、備前、伊賀、信楽、萩、唐津、そして樂を中心とした和物である。

第3章では、桃山茶陶の美的特質が顕著に表れていると思われる、代表的な伝世作品を中心に採り上げ、さらにその周辺にある類似作品とも併せて検討することによって、それらの基底に流れる美的特質を考察した。そこでは機能別に「喫茶の碗」、「空間構成の器（水指・花入・茶入）」、「食事の器」に分類して検討した。

第4章では、桃山茶陶の美について、その言説に注目し、その変遷を検討した。大正期には、美的性格についての言及が、「景色」という茶の湯世界の内側の表現に留まる傾向にあったものが、近代美術の「表現」という価値観へと開かれ、造形的な側面にも視線が向けられるようになっていった。昭和期には、「侘」、「寂」、「庵相」が茶陶の審美観として採り上げられ、それらは造形理念として捉えられていった。また岡倉により使用された「不完全」という語は、桃山茶陶の造形的特徴である歪んだ造形などを表す語として定着していく。最後に「桃山茶陶」という美術用語の初出と考えられる蓮実論文では、どのようにその美的性格が捉えられているのかを分析した。

第5章では、桃山茶陶の美的特質の背景にあるものを、その造形的な淵源と、理念的背景に分けて考察し、最終的には、桃山茶陶の造形的指向の特性を導き出した。桃山茶陶の展開した時期には、このような侘数寄の茶の湯の理念や美意識が求心力となり、それは国内だけでなく海を越えて拡大していった。その集中性のなかに見られる焼物の中に、高麗茶碗、安南という海の向こうからもたらされた茶陶があった。

第6章では、まず高麗茶碗の美意識や美的価値を東アジアという視点から検討し、そこに浮かび上がる複雑な文化交渉の姿を明らかにした。そこにはヒトとモノそして情報の「移動」と「接触」だけでなく、それに伴う美的価値の「誕生」・「移動」・「美的選択」・「理解」・「吸収」・「変容」・「融合」という交渉が複雑に展開されていたことを示した。

第7章では、本来的な茶道具の美を顕現させる茶室の空間的特質を検討するために、堀口捨己の茶室論を採り上げる。近代において、茶室を再評価したとされる建築家の研究のなかでも、堀口の茶室論は、茶の湯を基盤とした空間論で、茶の湯空間、ヒト、モノを総合的に連関させた研究であり、「機能と表現との一元的な完成」という視点で、その「美」を探究した。

結論としては、ポーズの西洋的な美術と同じ視点による独自の分類や、奥田の近代美術の「表現」という視点によって、荒川の志野の陶片発掘以降、美的対象として研究の俎上に載せられることになったのが「桃山茶陶」であったといえよう。桃山茶陶の造形的特質には、焼締などに見られる破れ、焦げなどの「不完全性」や「無作為性」、器形の歪みなどの「非対称性」、樂などにみられる「非存在性（同化的要素）」、織部などに見られる「自然の抽象的再現性」、あるいは「静的」と「動的」など、さまざまな引き出しをもつ造形的要素が、重層的かつ並存しており、一つの様式として纏めることは困難な茶陶群であると規定する。しかしながら、それらに通奏低音のように流れる指向性がある。それは、「自然性と抽象性とのせめぎ合いのなかで生まれる均衡美」である。

## 論文審査結果の要旨

本論文は「桃山茶陶」の概念をめぐって、その定義の学問的あり方を問う研究で、「桃山茶陶」の美的特質を明らかにしようとする独創的な研究である。美的特質の解釈については、末吉論文の独自性が認められるが、他方、美術史的には正当なアプローチだとはいえ、いささか主観的な解釈が先行しすぎているのではないかと、という審査委員からの意見が出た。また、「桃山茶陶」を特定の様式にとらえる立場についても、問題が残るという審査委員からの意見が出た。志野、織部、瀬戸、備前、伊賀、信楽、萩、唐津、そして樂にわたる多様な様式の「桃山茶陶」を、ひとつの様式として定義するのは、少し無理があるからである。しかし、こうしたアプローチは、従来の研究を越える意欲的なもので高く評価できる。また、本研究では日本の陶磁器のみならず、海外の陶磁器にも言及がなされ、それらもまた「桃山茶陶」に含めてもよいのでは、という主張がなされているが、一方で「桃山茶陶」は「日本的な情趣性を表現したもの」という定義がなされていることから、いささか矛盾する見解と思われる箇所が散見されることから、さらに論理の整合性が求められるのではないかと、という審査委員の意見も出た。この点については、興味深い研究でもあることから、今後の研究課題となろう。加えて、堀口捨己の茶室論を踏まえた「空間の中の茶陶」という主張では、桃山時代の日本のみならず、江戸時代から近代において、そして朝鮮半島やその他の海外の地域においても茶陶の用いられ方は共通する面もあることから、東アジアにまで考察を広げて考える必要がある、という審査委員からの意見が出た。こうした研究の関心も、今後の可能性を秘めるもので、むしろ研究の発展を促すものとなろう。

論文全体として惜しまれるのは、従来の研究を刷新する独自の意見が見られることから、

独創的な見解をもう少し前面に出して主張を行うべきではなかったか、ということである。

以上、本論文は今後解決すべき種々の問題点を抱えているとはいえ、将来性のあるスケールの大きさを示すとともに、基本的な文献を徹底的に駆使して、桃山時代の陶磁器についてしっかりとまとめられており、また、「美的鑑賞」をめぐる独自の感性が披露されていることから、従来の陶磁史研究と比較して、かなり珍しい論攷である。その点から言って、博士論文として水準に達していると判断できる。

末吉氏は学会発表や論文などの業績も十分であり、これからも学術分野での活躍が期待される。よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。